

## 《討論》

## 植民地主義・解放・冷戦の歴史経験を再考する

## — 解題と応答 —

板垣竜太

以下に掲載するのは、2022年3月8日（火）にオンラインで開催された書評シンポジウム「植民地主義・解放・冷戦の歴史経験を再考する－板垣竜太『北に渡った言語学者：金壽卿 1918-2000』(2021年)を手がかりに」のうち、私（板垣竜太）による「自著解題」と、評者（塩川伸明氏、戸邊秀明氏）の書評（本誌所収）に対する「応答」である。シンポジウムでは、私がまず自著解題を報告したのちに、評者のコメントがあり、それに対して私が応答するという順序で進化した。したがって本稿の「1」、次に本誌所収の書評、そして本稿の「2」という順序で読んでいただくと、当日の話の流れがよりよく理解できると考える<sup>1)</sup>。

## 1 自著解題

本日は、新型コロナウイルス感染症がなかなか収まらないなかで、このように拙著をめぐる会を開いてくださりまして、本当にありがとうございます。光栄に存じます。

今ロシアのウクライナ侵攻が続いていて、刻一刻と状況が変わっています。そうしたなかで、このような会を開いているので、ついつい重ねて考えてしまいます。この本自体、朝鮮戦争というものが決定的に重要な要素となっています。その一帰結として家族が離散していくことが一つの大きな背景となっています。現在、ウクライナでは何百万もの多くの人たちが国外に逃れる一方、成人男性たちが動員されて国に残っています。つまり家族のまた新たな分断が今まさに大規模に起きています。そういう状況を横目で見ながら、このような会を開くことは、この本の読みにもまた別の新たなリアリティをもたらすでしょうし、大きな意義があると思っております。

今日の集まりは、「植民地主義・解放・冷戦の歴史経験を再考する」が大きなテーマでして、私の本はその「手がかり」という位置付けとなっていますので、あまり著者が

出しゃばり過ぎるのはよくないなとも思います。とはいえ、それなりにたくさんのごことを盛り込んだ本でもあり、私のほうから議論の素材になるようなものを一定程度提示しておいたほうが、その後の討論のためにいいかなとも思いまして、「自著解題」を用意させていただきました。

「解題」というのは、辞書的な意味では「書物や作品の著者・成立事情・内容・体裁・出版・発表の年月、他に及ぼした影響などについて解説すること」となります（大辞泉）。このなかでも本日はとりわけ「成立事情」とでもいうべき部分を今からお話しようと思います。この本でも、どうやってこんな本を書くことになったかという議論は少し言及しているのですが、今日はそのなかでも問題意識を中心にお話ししようということです。

「問題意識」ということばは、従来、日本の学界や韓国の学界では結構使う表現ではあります。しかしこれは、たとえば英語圏の研究者からすると、やや異文化的なアカデミック・カルチャーであるとも言われます。その辺については、歴史学者のキャロル・グラックさんが初めて日本にやって来られたときのエピソードとして次のように書いておられます<sup>2)</sup>。

東京に到着してまもなく、明治のイデオロギーを研究するつもりで日本に来たことを聞いていた親切な教授は私に尋ねた。「それで、あなたの問題意識は何ですか」。私は彼が何を言っているのかさっぱりわからず、その問題意識なるものをコートと一緒に廊下に脱いできてしまったのではないかと思ったくらいだった。[...]これが私にとって最初の、そしておそらく最も貴重な、日本の恩師や同僚から学んだ教訓の一つである。

研究テーマとは別に「問題意識」は何かと問われて、一体何を答えていいか分からなかったという話ですね。私自身、この問題意識という考え方は、研究テーマの背景にある動機や、あるいは自分のポジショナリティといった点において、とても大事なものだと思っています。こういう問題意識という考え方自体が、だんだん日本や韓国の学界でも弱くなっているように感じてはいるのですが、やはりここが何かをする際の出発点だと思っています。

### 1.1 北朝鮮研究をはじめまで

私自身、今年でちょうど半世紀を生きることになりましたが、大学に入ったのは1991年です。文化人類学を専攻として選んだのですが、最初はあまり学問の事情にも詳しくないまま、何となく憧れみたいなもので入ってしまったところがあります。しかし、それが大間違いだったことに入ってからすぐ気づきます。

というのも当時の文化人類学は、1980年代の終わりぐらいからではありますが、批判と自己批判の流れがかなり強くありました。植民地主義と人類学の関係とか、他者を描くことの権力性の問題とかそういったことが、1986年に『文化批判としての人類学』(*Anthropology as Cultural Critique*)と『文化を書く』(*Writing Culture*)という2冊の本がともに出たことを一つのきっかけに、かなり激烈に巻き起こっていました<sup>3)</sup>。大学院生たちも「この後われわれはどうすべきか」などと言いながら、非常にシビアな議論をしているようなところに飛び込んでしまったわけです。そのような議論を交わしながら、何か遠い国のことを知りたいなというぐらいに思っていた自分のロマン主義的、かつ植民地主義的な態度を反省することになりました。

ちょうどこの1990年代は、どこか歴史というものを考えないといけないという雰囲気がありました。いつの時代もそうだとはいえそうなのですけれど、もともと高校時代に歴史の科目が嫌いだった私にとって、1990年代は、ちょうど大学・大学院生時代でもあって、決定的な転機となったのです。大学に入った1991年はソ連崩壊の年でもありますし、<sup>キムハクスン</sup>金学順さんが日本軍「慰安婦」制度の被害者として名乗り出て、そこから日本軍「慰安婦」問題が大きく展開をしていった節目の年でもありました。「朝まで生テレビ」などで、こうしたテーマで盛んに議論がおこなわれてもいました。それから1995年というのは戦後50年の年でもあります。戦後50年国会決議があったりもしました。この年にちょうど私は学部を卒業するわけですけど、そういう雰囲気の中かで、やはりこの日本からどこか遠い社会のことを研究するのではなくて、むしろ歴史的に深い関係を持つとともに自分自身を問い直すこととなるような朝鮮半島研究をやろうと志すことになりました。

初期には、ある種の自己反省的な流れの中かで日本の人類学史の批判的研究をおこなっていました。特に朝鮮半島に関する人類学的研究を、20世紀の前半さらには19世紀までさかのぼって、それを批判的に検討する作業からはじめました。それ自体を研究テーマにしようかと思ったこともありました。ところがこのような作業を進めていると、やはりこれはどこか学問の内部の話にすぎない。自己反省的ではあるのだけれども、どこか

自己閉鎖的なものにすぎないのではないかと思うようになります。それを検証しているだけでは植民地主義の遺産から抜け出し切れないのではないかと、むしろ人類学者が見ていた植民地社会、見ていたはずだけれど描けなかったものを自分が描くことで克服しようと志すにいたります。それが私の博士論文になりまして、それが2008年に出た『朝鮮近代の歴史民族誌』という本になりました<sup>4)</sup>。そこでは日本が植民地統治をしていた時代の朝鮮半島に生きるとはどのような経験だったのか、つまり「植民地経験」を描こうとしました。その際、それを日本が統治をした時代だけ切り取って描くのではなくて、むしろそれ以前の朝鮮時代からの歴史の大きな流れの中で植民地時代を相対化するような書き方を目指しました。

ただ、それをなしとげるには朝鮮半島はあまりに巨大過ぎます。そこで、より小さな地方を〈方法〉として選びました。地方を絞り込みながら、しかし総合的に描くということをやろうとしました。その際に、「神は細部に宿る」という有名なことばがありますけれど、それを借りてきて「世界史は細部に宿る」などと言いながら、この本を書いたわけです。韓国でフィールドワークをしたのがもう20年前の話になります。

そこから私は北朝鮮研究へとシフトしていきました。そこにもプロセスがありまして、最初から今みたいなことを考えていたわけでは全くありません。もともと私の北朝鮮との距離感は、関心はある、しかし自分がそれに手を付けようなどとはあまり思わない、もう少し言えば忌避とでもいうべきものがあつたと思っています。フィールドワークも簡単にはできない、実証研究は難しいだろうという先入観を持っていました。北朝鮮観としても、韓国のかつての軍事独裁政権のイメージを北朝鮮に単純に投影したような、そういう見方しか当初は持ち合わせてなかったと記憶しています。

それでもやはり正面から北朝鮮研究をやらなければならないと思ったのは、ちょうど20年前の2002年9月、日朝首脳会談の衝撃を受けてのことでした。「衝撃」というのはいくつかの意味があります。一つは日本と韓国が1965年に結んだ日韓条約の方式で植民地支配の責任の問題を妥協してしまったことです。韓国に対しては、北朝鮮はそんなやり方はいないはずと批判してきたわけですけど、2002年9月に突如、日韓条約方式で植民地問題を処理する方向で日朝平壤宣言を出したということの衝撃がまずありました。

それから、それ以前まで北朝鮮は「日本人拉致問題などというのはでっち上げだ」と言っていたところ、当時の金<sup>キム</sup>正日<sup>ジョンイル</sup>国防委員長自身が「わが国の人がやりました」と告白をするということがあり、それもやはり衝撃だった。

でも、そこからの日本社会の状況が、私にとっては北朝鮮研究をやらなければと思った大きな動機でした。拉致事件の発覚を受けて、日本の政治もメディアもこぞって被害者意識をもって北朝鮮を一様に攻撃しはじめたわけですね。そして私が悟ったことは、この憎悪・偏見に満ちた日本の北朝鮮論とワンセットのように、北朝鮮研究の層が薄いということでした。北朝鮮研究、実証研究をやる人は決して日本では多くはありません。大事な研究も出ていますが、層が厚いとは言えません。テレビ等のコメンテーターとかで出る人も、だいたい日本政府の擁護側についていました。そうした体制順応的な、あるいは評論的な北朝鮮論が氾濫していきました。そうした北朝鮮への攻撃とともに、在日朝鮮人、特に朝鮮総聯や朝鮮学校への攻撃が強まっていきました。そうした状況で、何か自分なりの北朝鮮研究を作らなければと思ったわけです。

参考までに、2003年に和田春樹さんと高崎宗司さんたちが『北朝鮮本をどう読むか』という本をまとめています<sup>5)</sup>。2002年まで書かれた700冊以上の日本での「北朝鮮本」を総合的に分析した本です(表1)。表を見ても分かるように、1991年以降、どばっと大量の北朝鮮本っていうのが出てくる。ちょうどこの頃は日朝国交正常化の流れが一時盛り上がっていたころです。北朝鮮本の「洪水」という表現をこの本では使っています。ただ、その多くは反北朝鮮キャンペーンとでも言えるような内容で、この本の要約によれば、その柱は5つあります。<sup>キムイルソン</sup>①金日成偽者説、②金正日愚か者説、③個人崇拜／収容所支配／経済破綻の国である、④間もなく体制崩壊する、⑤戦争準備や核開発ばかりやっていると、だいたいこのような論点でできあがっていたと分析しています。

私はここに2002年9月以降の状況を踏まえて2つの柱を付け加えたいと思います。一つは、⑥「日本人=被害者」/「北朝鮮=加害者」イメージです。間違いなく日本人の

拉致被害者個人はいますし、その家族・遺族はいるわけですけれども、日本人全体があたかも北朝鮮の被害者であるかのような、そして北朝鮮全体が加害者であるかのような、そしてそのことによってかつての日本の植民地支配なんていうのは全部消え去ったかのような、そのようなイメージが非常に強くなっていきました。もう一つは、⑦北朝鮮と少しでも関連のある国内外の個人や団体は「反日」だ、こういう言説も非常に強くなっていきました。そういう状況を見ながら、自分なりの北朝鮮研究を構築していきたいと思ったわけ

表1 日本の「北朝鮮本」出版点数

年度	冊	年度	冊
1984	7	1994	75
1985	6	1995	46
1986	11	1996	38
1987	13	1997	64
1988	31	1998	54
1989	15	1999	79
1990	24	2000	53
1991	42	2001	28
1992	41	2002	56
1993	30	計	713

です。

このような北朝鮮言説は単純に隣国を見るまなざしではありません。私は、これは植民地主義と冷戦のフィルターを通じたまなざしの産物であると思います。これは克服すべきものです。ただ、それを克服するのに、「これはあかん」と批判だけしているのでは足りないと思ったのです。

## 1.2 「交差点としての個人」を研究対象に据える

そこで私はまず北朝鮮地方史の研究に取り組もうと考えました。私が韓国の尚州<sup>サンジュ</sup>という地方でおこなった方法を北朝鮮に応用するかたちで、どこか特定の地方の歴史を、1945年以前から1945年以後まで連続的に描くという構想を練っていました。というのも、実際韓国でフィールドワークをやっていたときも、現地ではない場所で得た史料のほうが量的にはむしろ多かったということがありました。であれば現地に行かなくても何とかできるのではないかと思ったのです。それで2009～2010年に大学のサバティカルを得て、ハーヴァード・イェンチン研究所に在外研究に行ったときからそういう調査を開始したのです。

植民地期の史料とか、宣教師文書とか、朝鮮戦争の頃に米軍が北朝鮮から奪い取っていった大量の史料群とか——<sup>ろかく</sup>鹵獲文書といいます。アメリカのナショナル・アーカイブにあります——、こういったものを通じて、それ以前の地域事情がそれなりに分かる場所をどこか選んでいこうとしました。その候補地の一つが咸興<sup>ハムフン</sup>という都市でした。

ところがこの研究が非常に困難であることに、やればやるほど気づいていくことになります。行かなくても研究ができるとはいえ、やはり土地勘もないところを研究するのは難しいのです。北朝鮮に行ったことは2度ほどあるのですが、あそこへ行きたい、ここへ行きたいと言って自由旅行できるわけではありません。リクエストはできますが、それが通らなければ行けません。今のところ私はこの咸興という都市には1回も行けないうまです。それに、咸興は「地方」といっても都市としては大きすぎて、なかなか手に負える場所ではありませんでした。そのようなわけで、研究の中心軸もどこに置いたらよいか分からず、研究上さまよっていました。

困難はそれだけではありませんでした。政治情勢の悪化にともなって、北朝鮮研究をやるための条件がどんどん悪くなっていきました。2006年以降は、日本が北朝鮮への経済制裁を強めていき、次第に取引なども難しくなっていきます。実際、第三国経由で北朝鮮のものを買うということにも規制がかかり、何たることか中国で北朝鮮の古本を

買うのにもそう簡単に進まない状況があります。それから先ほども言ったような「反日」攻撃が激化していきました。さらに、ちょうど2008年から韓国では保守政権に交代しまして、その点でも次第にやりにくくなる側面がありました。その関係か、実は「京都の研究者」は一時期韓国政府に疑いの目を向けられていた節があります。2012年にかなり大きな訪朝団が京都を拠点に組織されました。私もそのとき行きました。それがおそらく韓国の情報部を通じて何がしかの悪影響を及ぼしたのだと思いますが、京都の 코리아学関連の組織に韓国からの研究資金が入って来ない時期もありました。それは単に思い込みという次元ではなく、複数の筋から情報を得ています。

こういう状況のなかで研究の萌芽があったのです。この辺は本にも書いたところですが、2010年3月、ハーヴァードでの在外研究中に、当時トロントの郊外に住んでいた咸興出身の H. G さんという方——もう亡くなってしまいましたが——のインタビューをしました。インタビュー後の食事で合流したとある女性が郊外から市内のホテルまで車に乗せてくださいました。それが今回の主人公の キムスギョン 金壽卿の次女に当たる キムヘヨン 金惠英さん——カナダではイム・ヘヨンさんで通っていましたが——、この方だったわけです。

その車内で惠英さんが「実は、うちの父が北朝鮮でも結構知られた言語学者だった」というようなことをお話ししてくださいました。ご自身も ピョンギン 平壤で生まれましたが、朝鮮戦争のときに生き別れてしまった。その後、南に行った自分たちはカナダに移民した。そのうち父と文通が可能となり、再会もできた。そのような内容でした。お酒も飲んだ夕食後の車内ですから、メモもせず、お話として聞いていたのですが、とても印象的でした。ただ当時は北朝鮮研究はやろうとは思っていたけれども、北朝鮮の言語学も言語学者のこともほぼ何も知りませんでした。記憶には刻まれたけれども、そこからすぐに研究を展開するという感じではなかったのです。

実を言えば惠英さんとの出会いは全くの偶然でもなかったよだということが、だいぶあとになって分かりました。もともとトロントでのインタビューは、ハーヴァード大で朝鮮近世史を教えていて、朝鮮半島北部地域史についての編著もお持ちのキム・ソングジュ (Sun Joo Kim) 先生の紹介で実現したものでした<sup>6)</sup>。私は最初から H. G さんを紹介されたのですが、そのときにあいだに入っておられたのが実は惠英さん——当時はトロント大で教鞭をとっておられました——だったらしいのです。おそらくトロントで朝鮮半島北部の出身者に会おうと考えた時点から、どこかでいずれ惠英さんにお目にかかることになっていたのかもしれない。

さて、転機は2012年11月に訪れます。京都の、同志社大学の近くにある居酒屋で研究会後の打ち上げがありまして、話の流れのなかで、同志社大のコ・ヨンジン先生が北朝鮮の初期の言語学や言語政策を作った人物として金壽卿に言及されたのです。コ先生はもともとこの方面でとてもお詳しい先生です。そこで私の記憶がよみがえってきました。その場でノートパソコンを取り出して、カタカタと2年前のメールのやりとりを見直したところ、やはり私がトロントで会ったのは金壽卿の娘だったということを確認しました。先ほども言いましたように、当時の韓国は保守政権でしたから、越北した言語学者についてシンポジウムを韓国で開くなどということはできる状況にありませんでした。だけど韓国にも関心のある研究者がいる、あるいは中国にもいるということで、「日本にこういう人たちを呼んでシンポジウムをやろう」などという話になって、それが2013年11月の同志社大学での国際シンポジウムとなりました。その内容は、同志社コリア研究センターの研究叢書として発刊しました<sup>7)</sup>。

ただ、このシンポジウムの準備をはじめたころには、評伝を書こうなどというような考えを全く持っていませんでした。でもやっているうちにだんだんこの金壽卿という人に対して、あるいは金壽卿という人物が書いたものにどんどんはまっていった、このシンポジウム開催した頃には、評伝を書きたいと思うようになっていったのです。ここで金壽卿の略年譜を掲げておきます（表2）。

表2 金壽卿（1918-2000）略年譜

1918	江原道通川郡で出生。
1934	郡山中学校を卒業。
1937	京城帝国大学予科を修了。
1940	京城帝国大学法文学部哲学科を卒業。東京帝国大学文学部大学院に進学。
1944	京城帝国大学法文学部朝鮮語学研究室の嘱託。
1945	解放後、京城帝国大学自治委員会法文学部委員。同辞任後、京城経済専門学校・教授。
1946	越北し、金日成大学文学部・教員。朝鮮語学講座長。
1950	朝鮮戦争勃発後、工作隊員として南派。家族と離散。
1958	科学院において金科奉とともに批判される。しかし研究・教育活動は続ける。
1968	国立中央図書館に司書として転職 [= 左遷]。
1988	北京で開かれた国際学会に出席し、家族と再会する。
1990	博士学位を授与される。
1992	教授学職を授与される。
2000	逝去。

今述べたように、まず金壽卿の書いたものや歩みの面白さにはまったことが出発点でした。その次に地域ではなくて個人に注目することで、むしろ研究の突破口が開けるの

ではないかと思いました。かつて日記を歴史研究の素材にした経験が何度かありましたし、京都ではたくさん在日朝鮮人のライフヒストリーの聞き取りをやっており、個人をずっと丹念に追っていくことでいろんなものが広く開けてくるという経験を幾度もしてきました。だからこそ、個人を中心とした研究のやり方があるのではないかと思ったわけです。

その際に利用したのが〈評伝〉という形式でした。「評伝」は漢字語で、コリア語にも中国語にもある東アジア共通の語彙です。伝記の一種ですが、そこに批評が加わっているという点が評伝の特徴です。この評伝の形式を借りようと思ったわけです。その個人に関わることであれば、ある意味何を放り込んでもいいというのが評伝のいいところだと思います。その評伝という形式を借用しながら、個人を起点とした、ある種の個性的な世界史とでも言うべきものを描いてみたいと思ったわけです。拙著では「交差点としての個人」という言い方をしていますけれど、いろいろなものが横切っていく存在としての個人ということを考えたのですね<sup>8)</sup>。そのように書くことによって、むしろ幅広い歴史叙述が可能になると思ったわけです。

このようにまず個人のライフヒストリーがある。そこにその個人を取り巻く家族、特に離散家族史の物語もある。それから言語学史を中心とした学術史もある。さらに言語学者のなかでも<sup>キムドッボン</sup>金料奉という人物が、1940～50年代の北朝鮮の政権の中核におり、政治史も絡んでくる。この辺を全て貫くような著作ができるのではないかと考えながら、研究を進めました。

時代としても植民地期から解放後、2000年代にまでわたっていますし、地域としても南北朝鮮、日本、中国、ソ連、カナダにわたっている。あるいは研究領域としては、学問とか政治外交とか、戦争と分断とか、離散家族というようなことにもわたっている。小さいことをやることで、むしろ幅広いことができるのではないかと思ったわけです。

もう少し学問と政治との関係について述べておきましょう。ここでは3つの系列で整理しておきます。①構造主義、②朝鮮語学、③ソビエト言語学+マルクス主義、です。①20世紀の思想の一大潮流ともいえるものが構造主義です。西欧ではソシュールに端を発するものですが、そのソシュールの『一般言語学講義』を最初に日本語訳した、というか世界で最初に別言語に翻訳した人が小林英夫という人物でした。この小林英夫が京城帝大にいて、金壽卿がそこに私的に弟子入りしていくというようなことがありました。越北後の金壽卿は、ソシュールや構造主義についてほとんど語っていませんが、その学問の枠組にはその痕跡が深く刻まれています。

ちなみに私個人の話ですれば、私がかつて人類学という学問分野に入っていったときに、最初にはまった本はクロード・レヴィ=ストロースでした。レヴィ=ストロースを理解するためにソシュールやヤコブソンも勉強していましたが、フレドリック・ジェイムソンに導かれながら構造主義におけるロシア・フォルマリズムの系譜もたどったことがありました<sup>9)</sup>。そうしたこともあって、この構造主義というのは私自身にとっても学問の出発点となった大事なものでもありました。

②朝鮮語学は、京城帝大や東京帝大に小倉進平がいましたが、金壽卿は文献学的なものは小倉から学んだと思われる一方で、やはり理論的には小林英夫を介した西欧の言語学だったといえます。一方、<sup>チュシギョン</sup>周時經という朝鮮語学の創始者とされる人がおり、その一番弟子ともいえるのが先ほども言った金料奉でした。越北後の金壽卿は、金料奉のもとで自らの力を発揮していきました。しかし先述のとおり、この金料奉が1958年に<sup>キム</sup>金日成の批判を受けて失脚してしまいました。

③そしてソビエト言語学においては、1930年代以降だと思いますが、ニコライ・マルとその学派がマルクス主義言語学の新たな体系をつくったとされており、それが主流の学説になっていきます。越北後の金壽卿もその一部は紹介していました。ところが1950年になってソ連の最高指導者であるスターリンが言語学論文を『プラウダ』誌に出し、マル学派の所説はおかしいと批判するわけです。さらにはスターリン死後になると、フルシチョフのスターリン個人崇拜批判が北朝鮮の体制にとっても大きな影響を及ぼします。学問史にとっても大きな影響を及ぼし、金日成の金料奉に対する政治的批判も、北朝鮮の朝鮮語学界の金料奉への言語学的批判も、こうしたソ連の動向との関係で展開しました。

このように金壽卿の足跡をたどっていくことで北朝鮮とソ連の学問と政治が入り乱れるような状況が見えてきたのが2013年のシンポジウムの準備過程でした。だからこそ、それを評伝の形式をとって書こうと思ったわけです。

そのために、まずは史料が必要です。北朝鮮研究では刊行史料も実は手に入れるのがそれほど簡単ではありません。これだけであちこちさまよい歩きましたし、古本にも相当つき込みました<sup>10)</sup>。それから公文書としては、先ほども言ったアメリカにある北朝鮮の原史料（鹵獲文書）ですね。こういったものを見に行ったり、韓国の国史編纂委員会で収集したのも活用しました。あるいはご遺族が持っていた書簡、写真アルバム、金壽卿自身が書いた朝鮮戦争手記、こういったパーソナルドキュメントも活用しました。インタビューもトロント、ソウル、ロサンゼルス、あるいは北京でおこないました。イ

インタビューの一環として、かつて金日成綜合大学の官舎というのはこんな間取りだったというようなことを遺族に描いていただいたものも活用しました。

それらの幅広い断片群を本のかたちにとまとめたわけですが、実のところ当初は非常に古典的な評伝スタイルで時代順に構成していました。2018年が金壽卿生誕100年だったので、2018年に完成させようなどと思って、その年のはじめに一度本は書き上がっていました。その段階では今のような本の構成にはなっていなかったのです。ただ時系列に章を並べ、1つの章に言語学の話もあればライフヒストリーの話も混在しているというようなものでした。

その後その原稿を何人かの方に見ていただいたところ、非常に面白いのだけれども読んでみると言語学のところで読書がつかず、そこで止まってしまうというコメントを、実は1人でなくて2人から共通して聞くことになりました。だからといって第1部はライフヒストリー、第2部は言語学といった構成にはしたくなかったのです。やはり両者が絡まり合っていくかたちにしたいということで、この個人-政治史と言語学史の2つの系列のストーリーが行ったり来たりという「対位的評伝」というスタイルができあがりました(表3)。ただ、一度仕上がった原稿をもう一度バラバラにして構成しなおすというのは、もう一度本を書き直すような苦しさもありました。

表3 『北に渡った言語学者』の構成

個人-政治史		言語学史	
はじめに			
1918-1945	第1章 植民地のポリグロット	構造と歴史：金壽卿言語学のはじまり	I 1940s
1945-1950	第2章 解放と越北	朝鮮語の〈革命〉：規範を創出する	II 1940s
1950-1953	第3章 リュックのなかの手帖：朝鮮戦争と離散家族	民族の言語とインターナショナリズム	III 1950s
	第4章 朝鮮戦争下の学問体制再編		
1954-1968	第5章 政治と言語学	〈主体〉の朝鮮語学	IV 1960s
1945-2000	第6章 再会と復権		
おわりに			

### 1.3 批判的コリア研究

こうして1冊の本がまとまりました。この本の最後の方に、こういうことを克服したいと私自身は思っているというメモを掲げています。「マニフェスト」というよりは9

つの項目からなるメモです。長くなりますが引用しておきます。

- ①北朝鮮に対する極めて偏った知的関心。
- ②植民地史には関心があっても解放後史には関心がない、あるいはその逆に解放後史を植民地史から切り離して捉えるような研究の時間的スパン。
- ③日本（人）が植民地期におこなったことや、解放後に残された「遺産」にだけ関心をもつような、反省的であるともいえるが、どこかしら帝国主義と裏腹の関係にある研究態度。
- ④植民地期や冷戦期の抑圧や制約の下に置かれた人々の行為者性<sup>エイジェンシー</sup>や、限界のなかでの創造的な思考を度外視したり、逆にその主体性を無前提に賛美したりする「上」からの視点。
- ⑤朝鮮史を叙述する際に、その国内的な状況だけを見るか、逆に大国に振り回された存在としてのみ見る一方的な観点。
- ⑥社会主義やソ連という存在を、単にもう一つの抑圧体制ないし帝国主義に過ぎないと位置づける、あるいはその逆に偉大な解放者として扱うようなイデオロギー的姿勢。
- ⑦研究者の属する学問分野の枠組にとらわれ、特定の部分のみを切り取ろうとする知的制約。
- ⑧民族主義的な枠組みを思考の前提に歴史を語る、あるいは逆に民族や民族主義に対する内在的な理解を抜きに歴史を語ろうとする非歴史的思考。
- ⑨結末から遡って、それに至るプロセスの説明としてのみものごとを語る結果論的な歴史叙述。

これは、ある学会の報告を準備していたときに、15分ぐらいで書きなぐったものを少し整えたという程度のもので、このようなことを問題意識として書いたということを羅列してみたものにすぎません。注意していただきたいのは、これが「私は既にこれらを克服しています」という項目のリストではなくて、やはり私自身もこのような問題を抱えてきたし、おそらく今でもどこかで抱えている、しかし何とかしたいと思っている、そのようなリストとして挙げているつもりです。こういう試みとして考えているということなのです。

こうした研究を進めながら、私のこれまでの研究というのは一体何なのだろうかと振

り返る機会がこの数年ありました。文化人類学が学部以来の専門領域なのですが、ウィキペディアを見ると、誰が書いたか分かりませんが、板垣竜太は「歴史学者」となっています。さらに、いま所属しているのは社会学の学科です。何かディシプリンのよく分からないところにいるわけですけど、ここ何年かは「批判的コリア研究です」と自らの研究の領域という構えを位置づけるのが一番しっくりくると思うようになりました<sup>11)</sup>。

ここは端折って説明します。近代世界システム論で知られるウォーラステインの議論を踏み台に、批判的コリア研究のポジションを今から語ろうと思います。ウォーラステインはもともとアフリカ研究者でした。しかしアフリカだけ見てもアフリカのことが分からないとある時期に思うようになり、そこから分析の単位を広げて世界システム分析を構想することになりました。

図1 ウォーラステインの学問史における世界システム分析の位置づけ

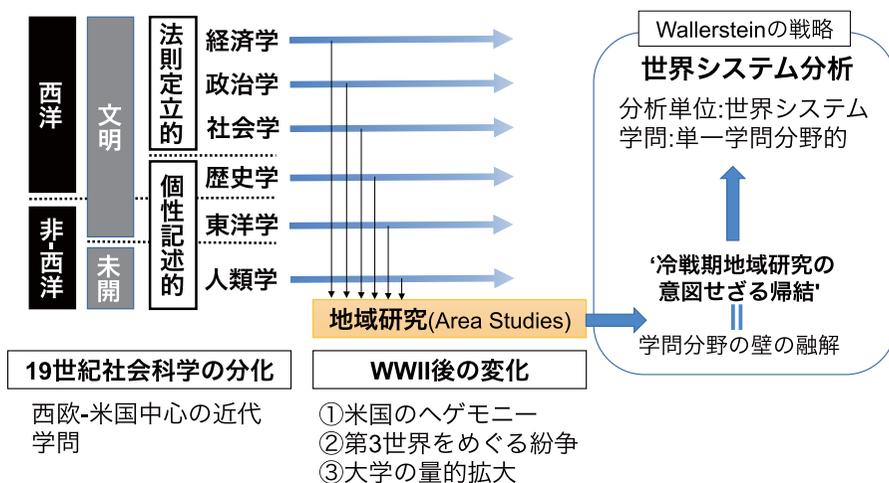


図1は、ウォーラステインの考える学問史と、その系譜における彼の世界システム分析の位置づけを図式化したものです<sup>12)</sup>。彼は、地域研究というものまさに冷戦の産物であるということは十分に理解していました。しかし、この冷戦期の地域研究は「意図せざる帰結」があったと述べます。それは何かというと、ある地域を研究しようとさまざまなディシプリンの学問が寄り集まった結果として、さまざまな学問分野の壁がはからず融解していったということです。このもともとの学問分野の分化のしかた自体が、19世紀の近代世界システムのなかで西欧および米国がもっていた植民地主義をはらんだ近代の世界観（西洋と非-西洋、文明と未開、…）の産物だったわけですが、そ

れが冷戦期の状況のなかで意図せざるかたちで混ざり、その分化の恣意性が露呈したというのです。ウォーラーステインは、そうやって融解した状況を踏み台にして、分析単位を世界システムとし、学問分野はばらばらの学問ではなくて単一学問分野、つまり「世界システム分析」という一つの学問分野に統合してくのだという方向を打ち出しました。

途中までは私も理解します。冷戦期地域研究の「意図せざる帰結」をさらに延長したところに、植民地主義と冷戦の権力構造を克服する新たな地域研究の在り方を考えていきたいという、そこまでは私も同意するところです。しかし、その可能性の展開は、近代世界システム論のような巨大な単一システムの分析に向かう統合的な方向しかないのかという点で疑問を覚えます。私には、これが「ウォーラーステイン帝国」のように見えてならないのです。それに対して私は、近代世界システムのような統合へと向かう一歩手前にある、地域研究の批判的な契機は継承しつつ、まずは植民地主義と冷戦に抗するような地域研究を「批判的地域研究」と呼び、そのような意味でのコリア研究を「批判的コリア研究」と呼びたいと思うのです。その一つのサンプルとして、この本を自分なりに位置付けたいなと私は考えています。

このように名づけたとしても、私はこうした批判的コリア研究というのは、少しも「新しいもの」だとは思っていません。戦後日本においても、在野的で体制批判的なコリア研究の系譜は脈々とありましたし、そのような権力の布置に対して批判的な知的系譜の延長線上に、私も含めた批判的コリア研究を位置付けたいと思っています。

その際に分析単位は、最初から広く統合的に設定する必要は全くないと思っています。先ほどから言っているように、「個人」のような、より小さなものを調べ上げることを通じて、地域や分野を超えた叙述は可能であるし、そういう一つの個性的な全体史として、この本を作り上げようと思って取り組んだ次第です。

著者解題はこれぐらいにしておきたいと思います。

## 2 応 答

まずお2人の書評者に対して、深く感謝を申し上げます。本書をとっても深く読んでくださり、コメントしてくださったと思っています。実は事前には、お2人とも「内在的な読みはできない、外在的なコメントしかできない」というようなことをおっしゃっていました。しかし、先ほどのお話はいずれも拙著の内容を十分に捉えたうえで、そこか

らさらに先に展開していくようなものだったと思っています。私からは、出していただいた論点について、個別にお答えできる範囲で話すことをもって応答とします。

## 2.1 塩川伸明氏への応答

まず塩川さんの書評、とてもありがたく存じます。朝鮮史をこえて、ロシア史・ソ連史の観点からはどのように読まれるのだろうかと不安に思っていたところもありますが、たいへん勇気づけられました。

まず、「知の社会史の事例としての京城帝国大学」(1.2)についてです。これに関しては異論というよりは、おそらく塩川さんなりの観点からの補足と理解しています。これは基本的にはおっしゃるとおりだと思っています。そこでここでは、とりわけ大学が生産している知というものが、大学外で生産される知との関係で、どのような位置を持つものなのか、ということ、あらためて少し考えてみたいと思います。

かつて私は植民地期朝鮮における人類学の歴史を少しかじったことがありますが、そのときの印象としては、そうした分野では、大学に勤めている研究者や、朝鮮総督府の調査事業のような、そうしたいわば「体制側」の研究の占める位置がとても大きいものでした。在野の研究ももちろんありましたが、「体制側」の学問を相対化できるようなポジションにまでは至っていないとはいいいにくいところがあったと思います。しかし言語学に関しては、京城帝大などがつくり出していく知識のあり方が、ある意味では「一部」にすぎないといえる部分がありました。たとえば朝鮮語学会事件で有名な朝鮮語学会に代表されるように、いわゆる「官学アカデミズム」とは少し違うところで、言語学の営みが幅広く展開していた側面があります。その辺も含めて在野の言語学者や言語学の在り方も含めて見ないと、実は朝鮮語学の歴史は捉えきれないところがあります。

今回その点でいえば、金壽卿はアカデミズムのど真ん中にいたわけですがけれども、「官学」対「在野」という二分法だけでは見えてこない側面がありました。私が最初に植民地期の金壽卿について調べはじめたときには、京城帝大の朝鮮語学といえば、まず小倉進平や河野六郎なので、その学問の系譜との関係が何かあるだろうと思いついていきました。ところが、この研究スタイルは目に見えるかたちでは金壽卿にほとんど流れ込んでいないのです。小林英夫を窓口にして金壽卿がどっぷりと西欧の言語学に浸っていたということも、調べはじめた当初はよく分かっていませんでした。

それでさらに調べていくと、実は金壽卿言語学は、そうした日本の朝鮮語学や（同じく京城帝大にいた時枝誠記のような）国語学とは相当違うところから派生している言語

学であるということが見えてきました。それは在野の朝鮮語学、朝鮮語学会的なものともまた少し違うものでした。大学でつくられるアカデミズムを、そこに在職していた小倉進平や河野六郎のような講座担当の研究者だけに代表させ、その学問的再生産として捉えているだけでは、この辺はよく見えてこないわけです。これは一体何なのだろうかというあたりが、最初の方の関心事となりました。

この20~30年、日本であるいは韓国で学問史をやるときに、批判的に近代の学問を捉え直すという動向が、すごく強かったと思うのです。それでさかのぼっていくと、実はその近代というのは植民地帝国日本の近代でもあったというところで、この「帝国の学知」が問われていたと理解しています。ところが、そうやってオリジンに遡って、帝国の担い手側が作りだした学知ばかりを見ていくと、いかにそれが批判の作業であっても、朝鮮や台湾の知識人たちの知的なエイジェンシーがどこか霞んで見えなくなってしまう、という問題があるのではないかと。そういうことがこの本の作業を通じてあらためて分かったので、この「帝国の学知」シリーズをあえて一時代前のものとして扱って書いてみたという位置付けとなります。

それから「構造主義言語学・マール学説・スターリン言語学論文」(1.3)に関しては、私が何かをさらに加えて話せるようなことはありません。ただ、先ほどスターリン論文の結果として、ソ連ではある種のブルジョア言語学者たちが復権していくという流れについて言及があったと思います。ソビエト言語学については、私がそれを詳しくたどれるほどの語学力が全くないので、当時日本でも出ていたような概説や、あるいは英語圏で1950~60年代に出ていたソ連の言語学の動向を詳しく紹介しているような文献を見てみると<sup>13)</sup>、やはりスターリンのマル言語学批判の後に、かなり多様な言語学がソ連のなかで展開していた様子は見てとれました。

ところが北朝鮮では、このスターリン言語学論文が導入されたときに、スターリン自身は「自由に討論しよう」なんてことを言うわけですけれども、それを受けて北朝鮮の言語学が多様化したかということ、そうではないと思いました。朝鮮戦争の真っ最中にスターリン論文が出たから、そんな余裕がなかったとも言えなくもないのですが、言語学が多様化した側面はほとんど見られません。北朝鮮ではむしろスターリンの言語学論文からそのエッセンスとみなされるものを抜き出して、それを朝鮮語学に接合するような作業が進められたと思います。その作業の担い手の中心に金壽卿がいました。その後、金料奉への批判がおこなわれるときに、スターリン論文にある「アラクチュエフ的支配」批判の論法が使われますが、それも言語学の自由闊達な討論を生んだというより

は、より強い引き締めとして帰結したと言ってよいと思います。ですので、北朝鮮はソ連の影響下にありながらも、また違った力学が作用していたと思います。

それから「家族の連絡復活の背景：冷戦終焉と東アジア」(1.4)に関しては、私がさらに冷戦終結史の勉強が進められたら、この辺の文脈がもっと分かるようになるだろうと思いつつも、今のところはこの本の記述が限界でした。おっしゃるように、韓国の北方外交、すなわちソ連や中国と結んでいく動きがありましたし、あるいは日本と北朝鮮、日朝も関係を結ぼうという流れが1989年、90年、91年と進んでいったわけです。それから米朝も実は近づいている状況がありました。そうしたクロス外交の動向ですね、ある種の冷戦構造を終わらせていこうという大きな外交的な枠組みが、この80年代の終わりから進行していたのは間違いなし、そのなかにこの物語があると私自身も思います。

ただそうした大きな構造のなかで、個人がいろいろ動いていたことも見逃せません。1988年、89年あたりの金壽卿の復権と国際舞台での活躍という点では、金壽卿の弟子筋がいろいろな働きをしたことが部分的には見えています。北京での1988年の大きな会議なども、<sup>チュウング</sup>崔應九さんという北京大の朝鮮語学者が南北朝鮮に働きかけ、日本ともつながり、そしてトロントにもつながって、そうやって国際会議を成功させようとしていました。もちろん、その国際会議が開催できたのは、この大きな冷戦終結に向けたプロジェクトだったように思います。私も単純に崔應九さんが純粋学問的に動いていたとは思っていませんで、かなり政治的な使命を帯びて、この1988年の学会をオーガナイズしたと思っています。まだ史料的には何も確認できてないのですが、崔應九さんの語りからもそうですし、当時このようなことを一民間人が実現できるものではないということからしても、外交的な何かの力がかなり動いていたと見てよいと思います<sup>14)</sup>。ただ、そうした大きな構造のなかでも、崔應九さんが金壽卿の弟子であり、その人の媒介でお父さんと娘の再会が実現したということで、構造とエイジェンシーの問題がここにも出てきます。この辺、今後さらに史料的に分かることがあるのではないかと期待しているところです。塩川さんへのリプライは、不十分ですが、この程度で終わります。

## 2.2 戸邊秀明氏への応答

戸邊さんは、拙著をどのように切ってくださるかな、史学史的に位置づけてくださったらうれしいなと思っていたところ、こう言っては何ですが、私の期待どおりに、というか期待以上に、私がちゃんと言語化してなかったところを展開してくださって、とて

もありがたく思いました。たくさん問いのボールを投げてくださいているのですが、打ち返せるところだけ話します。

戸邊さんのコメントは最初からかなり刺激的でして、「プロジェクトとしての〈評伝〉」(2.1.1)のはじめの部分、物語ることへの「欲求、あるいは責務の感情」というものがあつたのではないかと、という問いですね。私はこの動機について、確かに「端的に言ってしまえば、人の生きている歴史を描きたかつた」などと、かなり乱暴な書き方をしているなど、われながら思っています。この部分は、いま「おわりに」にありますが、実は当初この辺の記述は序論部分にあつたのです。もっとあの論文を引用し、この本を引用し、あれを批判し、これを批判し、といった序論、もう消し去ってしまった序論が存在していました。そのような論述をいくら書いても、読まれた読者は面白くないだろうということで封印した序論です。そういったアカデミックな手続きのような部分を全て取っ払った上で、なおかつ序論ではなくて、あとがきでさらりと書いて終わろうということで、こういう乱暴な書き方になっています。

私の人間観では、そもそもどのような個人も政治的人間であり経済的人間であり文化的人間であり、そういう意味ではどのような人も全体的な人間です。どのような個人も、その人を十全に描こうとするならば、非常に多面的にアプローチしなければなりません。ところが、学問の制約によって、それが十分に描けずにいるのではないかと、私自身の限界も含めて思っているのです。ですので、この9つのリストは限界の原因リストというか、十分に個人の経験を描き切れないように作用するような力のリストとでもいべきものと位置づけています。そこを、あの研究もだめ、この本もだめと、批判で終始するのではなくて、実際に私自身が描いてみることによって、多少なりとも突破してみたいという、その辺が私の欲求といえば欲求です。

おっしゃるとおり、私は従来この本のような文章の書き方をあまりしてこなくて、どちらかというとドライに書くほうが多かつたと思います。本書ではむしろ読む人たちを誘い込むようなかたちで、この限界を突破してみたいと思ったのです。これは私が大学で教えながら、いくら私がべらべらと分析的にしゃべっても学生に伝わらない話が、ちょっとしたドキュメンタリーを見せる、あるいはある個人の語りを聞かせる、具体的なイメージ映像を見せる、そのことによって何か学生にすつと伝わるという経験を何度もしたことも影響しています。

特に、「北朝鮮」というあまりに日本のなかで悪魔化された存在、先入観の押しつけの塊みたいになっている状況を突破するには、まずは、何といえよいか、人が生き

ている、人が考えている、人が悩んでいる、人がそれなりに主体的に行動している姿を、しっかりと伝えるところからはじまるのではないかという、そういう意味での物語る欲望というべきものはあつたらうかと、思っています。

「オルタナティブな歴史叙述への仕掛け」(2.1.2)について、戸邊さんは第6章「再会と復権」の多声性や他者性を指摘してくださっています。第6章だけが、評伝という一般的形式を念頭においた場合は異質なものであるのは間違いないと思います。それは、まずシンプルに言ってしまうと、1968年ころから88年ぐらいまでの金壽卿の足取りがほぼ分からない、言ってみれば20年の「穴」が空いているためです。一般的に言って、これほど最近まで生きていた人なのに、このように20年も「穴」が空いている人は、普通は評伝の主人公にならないでしょうね。では、それは本当に「穴」なのか、評伝として本当に「欠落」ということなのだろうか、「いや、違う」と思ったわけです。先ほど「交差点としての個人」と言ったように、トロント等に住んでいる遺族も「金壽卿」という存在を構成しているわけです。だからそういう意味では、身体をもった一個人の履歴が分からないからといって、その20年間を単なる空白とだけしてしまっただけではないという、そういう思いからこの章は書かれています。

すると金壽卿とは違う語りが出てくる。これもかなり意図的に出しているところもあります。見事に指摘してくださったように、「男性知識人と国家」というものを相対化する位置付けを狙ったところがあります。

後ろのほうで戸邊さんが、晩年の金壽卿の家族宛の手紙がだんだん「モノログになっていく」という言い方をされています(2.2.2)。実のところこれは、モノログになってくかなりの大きな史料的原因もあります。金壽卿が海外の遺族に送った手紙は全て揃っています。でも遺族のほうから平壤に送った手紙はありません。実際はあるのでしようけれど、見られる状況にないのです。李南載<sup>イナムジェ</sup>さんとかが手紙を書く際に、カーボン紙でも写しを残してくれていたらもちろんよかったですけど、そんなことは最初から考えてないわけですね。ここが見えてくるともう少しダイアログ的なものになったかもしれません。逆に、ひよっとすると、もっとすれ違った部分が見えてきてしまうかもしれません。コロナが収まって、いつか平壤に行ってご遺族に会えることがあったら、李南載さんが送られたお手紙も見せていただきたいなと願っているところです。

それから「期待の次元と回想の次元」(2.2)ですね。鶴見俊輔の自伝で用いられている概念とのことですが、本書にとってもたいへん適切な表現で面白いので、どこかで使わせてもらいたいと思います。回顧録の難しさというのは、まさにおっしゃるとおり

で、これを単なる客観的事実のまとめとは捉えられないところがあります。家族に宛てた私的な回想であると同時に、おそらく出版することも想定した公的なテキストでもある。戦場で書かれた記録とそこから復元された記憶にもとづく部分があれば、明らかに現在の見地から書かれているところもある。それらを腑分けしてどのように書くかと悩んでいるときに、金壽卿自身が文体論で「個人的文体」と「機能的文体」というような概念を提示してくれており、それにもとづいて切り分けました。

先ほど「モノローグ」については、まず史料的な問題もあると言いましたけれども、それだけではありません。戸邊さんのおっしゃる「期待の次元」の縮減について、本のなかでは過去の回想と朝鮮語学史の研究が増えていくというところに注目して私が描きましたけれども、それはたとえば解放直後の金壽卿の言語学と言語政策へのコミットメントと対照することでクリアに見えてくるものもあります。解放と建国の過程では、言語学的に「正しい」ことが政策的にも「正しい」ということになり得るという状況がありました。言語を規範化するということは、言ってみれば現在と未来をそのことによって変革していくということでもあります。自分が言ったことが未来に影響を及ぼし得る、そこにコミットするような言語学に携わっていたのですね。そこにはおそらく言語学者としてはある種の興奮に近い何かがあったのではないかと思っています。

しかし、1950年代末以降、そういう職からどんどん外されていきました。復権したころにはもう「晩年」といってもよい年齢となっていました。そのころになると金壽卿の研究は言語史へと回帰していったわけです。未来への投企というよりは過去への回帰ですね。もっとも拙著では、過去の朝鮮語学のテキストが東アジア諸言語研究の宝庫である、今後の国際共同研究が必要だという金壽卿の主張を紹介しながら、これもまた東アジアの未来への投企だという旨を書いたわけですが、そこでは既に自ら未来を切り拓くというよりは、次の代の研究者に希望を託すという感じになっていたように思います。この頃の金壽卿の手紙の全体のトーンもそうですし、回顧録もそうなのですが、何か申しわけないという感じが漂っています。妻に対して、何とか理解してもらいたいということですね。あのときどうして再婚したかという理由はほとんど書いていませんが、自分が置かれた状況を理解してほしいということで回顧録を書いている。でもやはり会いたい、でも会うのも難しい、そういうなかで次第に「期待の次元」が縮減していくことはあったと思います。

「2つの「国際／普遍主義」(2.3)に関しては、体系性という意味でマルクス主義と拮抗できる学問領域は言語学以外でどれだけあるだろうかという問いを提示しておられ

ます。これは確かに興味をそそる問いだと思いました。私は北朝鮮の「民俗学」の歴史を調べたことがあります。北朝鮮の「民俗学」は人類学と文化史のまざったような領域のものですが、これはかなり政治に振り回されています。北朝鮮では1960年代の初めに、悠久の「単一民族」という考え方がはっきり出てきます。北朝鮮民俗学はそれにどんどん押し流されます。それまでは近世朝鮮における女真との混血といったテーマも論じられていたのですが<sup>15)</sup>、そうした研究は消えていきます。というか、ほとんど学問的な独立性や体系性が見えなくなっていきます。歴史学も体制との関係でおよそできあがっていて、そういう意味ではおっしゃるとおりなのかもしれません。自然科学になってくると分かりませんが。

ただ、それは言語学が最初から体系的だということよりも、やはり金壽卿の学問との出会い方が重要なのでしょうね。おそらく金壽卿言語学の面白さは、ソシユールや哲学研究を踏まえながら、言語とは何か、言語学とは何か、言語学を含む学問とは何かというところまで一度ラディカルにさかのぼって考えたことのある人が、朝鮮語学を構築していったところにあるように思います。既に学問の枠や研究プログラムができていて、そのなかで切磋琢磨するというよりは、前提となるものから考えて書くからこそ、私のような人でも「なぜそれを解き明かすことが重要なのか」というあたりから理解できるのではないかと思うのですね。

それから「主体の形而上学」という難問(2.4)については、とてもクリアにまとめてくださったと思います。私がここでやろうとしたことの一つは「主体思想」<sup>チュチュエ</sup>ができあがっていくメカニズムを、より一般化したかたちで抽出しようということでした。あえて片仮名で「チュチュエ」みたいに言うと、とても特殊なもののように見えます。だからこそ、他に類を見ないオリジナルで偉大なものだという話にもなりますが、逆に全く関心のない人にとっては何か珍奇な思想というようなものにもなります。「特別」というにしても「異常」というにしても、どこか逸脱した思想のような位置付けになりがちなところがあります。

そこを私はあえて「正常化」することを試みました。「正常」という表現も変なのですが、思想史において、政治的な自立や自主を希求すること、あるいは模倣ではないオリジナルなものを求めようとするときに、常に出てきた問題の一つのバリエーションと位置付けたところがこの本にはあります。もちろんそれは中国、ソ連、日本、米国といった大国との関係から生成されてきたもので、そのあり方には固有の歴史性が刻まれていて、それが方形のハンゲルで書かれた「<sup>チュチュエ</sup>주체」の2字に表れているわけですが、そ

のできあがり方は決して「特殊」で「異常」ではありません。その辺をうまく切り取ってくださったと思います。

短くりプライするつもりがだいぶ長くなっていますが、これで最後です。グローバル・ヒストリーについては、日本国内での議論のされ方（一部なのかもしれませんが）にもともと違和感があったのですが、コンラートさん（以前この同志社での研究会にも来ていただいたことがあります）やリン・ハントの議論と共振する部分がある点を指摘して下さってありがとうございます。語弊のありうる「全体史」ということばをあえて使いましたが、実のところこれは人類学において、マリノフスキーがかつてフィールドワークのマニフェストのような文章のなかで、奇妙に見えるものも平凡に見えるものも「すべての文化現象」について可能な限り広範に具体的に調べよと提唱したことともつながります<sup>16)</sup>。ただマリノフスキーはトロブリアント諸島という空間に叙述の範囲をとどめ、その意味では植民地支配を含む「全体」をあえて描いていないのです。1980年代の民族誌批判の一つの論点はそこにあり、私はフィールドを世界史的に開いていくことをもって、その克服を目指しました。それを大枠からスタートするのでも、「上」から俯瞰するのでもなく、あくまでもフィールドからスタートすることを重視しました。金壽卿という存在にかかわって、うにようにとリゾームのようにさまざまな関係性が絡まり合っている。それらを可能なかぎり追跡し、描こうとすることを「全体史」とあえて呼んでみたわけで、それを「志向性としての「全体史」とおっしゃってくださったのは、たいへん適切だと思います。私の「全体史」は、語義矛盾のようですが、全体というものがない全体史、つまり何と言えよいのでしょうか、あらかじめ一般的で客観的な全体というものを前提にしない全体史だということを、この「部分性」とか「個人」の把握のしかたという点からまとめてくださったと思います。ありがとうございます。

#### 注

- 1) 当日はこれ以外に中野敏男氏、呉仁濟氏、菊池恵介氏、都留俊太郎氏にも、指定討論者として、それぞれの切り口から発言いただいた。ここに感謝の意を表したい。
- 2) キャロル・グラック『歴史で考える』（梅崎透訳、岩波書店、2007年）の「あとがき」より。
- 3) それぞれ日本語訳は、マーカス&フィッシャー『文化批判としての人類学：人間科学における実験的試み』（永瀧康之訳、紀伊國屋書店、1989年）、クリフォード&マーカス編『文化を書く』（春日直樹ほか訳、紀伊國屋書店、1996年）。

- 4) 板垣竜太『朝鮮近代の歴史民族誌：慶北尚州の植民地経験』（明石書店，2008年）。
- 5) 和田春樹・高崎宗司編『北朝鮮本をどう読むか』（明石書店，2003年）。
- 6) Sun Joo Kim, *The Northern Region of Korea: History Identity & Culture*, University of Washington Press, 2010.
- 7) 板垣竜太・コヨンジン編『北に渡った言語学者金壽卿の再照明』（同志社コリア研究センター，2015年）。
- 8) なお、交差点（intersection）としての個人という考え方は、インターセクショナルリティ（intersectionality）という問題提起と多少重なっている部分もあるのかもしれない。ただ、インターセクショナルリティがたとえばブラック・フェミニズムを一つの重要な軸として提起されてきた考え方であることを踏まえるなら、ただ複数の脈絡が流れ込んでいることだけで、それを「インターセクショナルリティ」と呼ぶわけにはいかない。交差点としての個人という考え方は、あくまでも経験を描く際のイメージという程度のものである。
- 9) フレドリック・ジェイムソン『言語の牢獄：構造主義とロシア・フォルマリズム』（川口喬一訳，法政大学出版局，1988年）。
- 10) こうした過程で収集した資料を中心に、私は同志社コリア研究センターの事業として、2021年9月に「コリア文献データベース（KBDB）」を公開した（<https://kdbd.info/>）。
- 11) これについては、이தாக기 류타「비판적 코리아 연구를 위하여：식민주의와 냉전의 사고에 저항하여」（『역사비평』132, 2020）を参照。
- 12) ウォーラーステイン&グルベンキアン委員会編『社会科学をひらく』（山田鋭夫訳，藤原書店，1996年），ウォーラーステイン『入門・世界システム分析』（山下範久訳，藤原書店，2006年）などより板垣が図式化。
- 13) 実はそうした文献は意外に多くある。私の手元にあるものだけでも、次のようなものがある。John V. Murra et al. ed., *The Soviet Linguistics Controversy*, King's Crown Press, 1951; F. Kiefer ed., *Trends in Theoretical Linguistics*, D. Reidel Publishing Company, 1973; M. S. Andronov et al. ed., *Linguistics: A Soviet Approach*, Indian Journal of Linguistics, 1988.
- 14) ソ連～ロシアの科学アカデミーで朝鮮史を担当していた故ユリ・ヴァーニン氏と話したことがあるが、彼は盧泰愚政権の北方外交の展開に際して、ソ連が韓国と国交を樹立することについて諮問を受けたと語っていた。彼自身はソ連崩壊後も共産党員だったが、それ以降は自分のような専門家に政府が意見を聞いてくることがなかったということをも嘆いていた。
- 15) たとえば、황철산『함경도 북부 산간 부락（《재가승》 부락）의 문화와 풍습』（과학원 출판사，1960）。
- 16) マリノフスキー「西太平洋の遠洋航海者」（泉靖一編『世界の名著 71 マリノフスキーレヴィ=ストロース』中央公論社，1980年）。